

博士論文（要約）

学校不適応的児童生徒の学校生活とその支援に関する研究

丸山 広人

本論文は、学校で生起する問題行動を、治療室や相談室の中だけでなく、日常的な学校活動の中から理解し支援することについて、主にフィールドワークと事例研究を用いて追究することを目的としている。その具体的な方法として、人と環境の相互作用を捉え、その適合をめざす生態学的視座からの支援について探求する。

本論文はⅣ部から構成されている。第Ⅰ部では、課題設定のあと、本研究における生態学的視座を検討し、研究方法について論じる。第Ⅱ部では、小学校における学校不適応的児童の学校生活を、第Ⅲ部では、中学校における学校不適応的生徒の学校生活をそれぞれ検討する。第Ⅱ部、第Ⅲ部とも、教師-生徒関係を取り巻く学校という場の特性をふまえつつ、その相互作用がどのように変容するのかという点を重視している。これらをうけて第Ⅳ部では、学校における生態学的視座からの支援について考察する。

第Ⅰ部では、学校臨床において生態学的視座がなぜ必要なのか（第1章）、生態学的視座から学校をどのように捉えるのか（第2章）、どのような研究方法を用いるのか（第3章）について論じる。

第1章では、学校が臨床心理学的知を導入しようとしてきた経緯を概観し、これまでは、学校という場の特性をふまえた援助という視点に乏しいことを明らかにした。そのため、環境と人の相互作用に焦点を当てる生態学的視座からの支援を検討することとした。

第2章では、生態学的視座から学校を捉えてきた先行研究を整理し、その理論的枠組みを検討した。従来、学校は、教師や生徒の行動を一定の範囲にとどめ置くような圧力をかけている場であると理解され、それは行動場面として捉えられてきた。行動場面は、ホメオスタシスの性質があると特徴づけられ、学校環境を固定的なものとして捉える傾向にある。しかし、本論文では、学校は家庭や管理職といった上位システムからの影響を受けて、常に変動しているという側面を強調し、その都度の変化が大きい場であると捉え直した。

第3章では、方法論について検討した。参与観察における観察法と心理臨床における関与的観察法を比較・検討して、その両者を用いながら研究を進めていくこととした。

第Ⅱ部は、発達障害の疑われた二人の男子児童の受け入れ体制づくり（第4章）とその男児の変容過程（第5章、第6章）、および小学校の特徴を生かしたスクールカウンセリング実践（第7章）からなる。

第4章では、発達障害の疑われていた二人の男子児童がどのように受け入れられ、どのように支援的コミュニティが形成されたのかについて、マイクロレベルだけでなく、メゾ、エクソレベルも視野に入れて明らかにすることを目的とした。学校を支援的コミュニティにした要因には、(1)関係諸機関との連携において、問題を子ども個人のものとするのではなく、現代的教育課題と捉えることによって、共通の語りが生

まれ、当事者意識が共有されていたこと、(2)先手をうった保護者との連携を築けたこと、(3)学校全体で問題を捉えることによって、担任が児童たちに柔軟に合わせ、適合を図りやすくなっていたことを見出した。さらに、(4)二人の対象児童たちの変容は、まず担任に依存しはじめ、その後友人関係に広がっていくといった共通のプロセスを見出すことができた。体制づくりの成功には、校長のリーダーシップ（コーディネート）が強く求められるが、そのためには、校長にもコミュニティを知るための時間が必要であるという課題もあることを指摘した。

第5章では、第4章で取り上げた男子児童の一人に焦点を絞って、教室の中でその児童がどのように変容していくのかを検討した。そして、この児童の変化は、プレイルームの中で行われる遊戯療法の治療プロセスと重なることを見出された。学校における支援を無理なく継続して行うためには、学校の日常場面に即した支援であることが望ましい。したがって、学校や教室で起こっている出来事を、学校臨床心理学の文脈で取り出し、その出来事の中に援助的作用や治療的意味を追究する意義は大きく、状況や場面の中で即興的に作り出される支援のあり方を探求していくことが必要となることを論じた。

第6章では、通常学級で療育的な場はどのように見出すことができるのかについて、引き続き第5章で検討した男子児童の事例を分析して明らかにした。療育的な場を、共同注意が成立し、情動が安定した中で、他の子どもとの活動を通して、その子の直面している課題に関する学びが成立している場と捉え、1年間の相互作用を検討した。その結果、療育的な場は子どもだけでは形成されず、教師が積極的に子どもの交流を促し、その場を見守っておくことにより形成されていることが明らかとなった。

第7章では、第4章～第6章で実施したようなフィールドワークの手法を取り入れた援助法を、小学校でのスクールカウンセリング場面において検討した。その援助法とは、まずはスクールカウンセラーが子どもの対人の場にかかわり、そこで得られるデータから仮説を立て、その仮説を保護者面接や担任面接で提供し修正するというものであった。この方法は、(1)小学校のニーズに合っているためスムーズな連携につながりやすく、(2)複数システムに作用するため素早い環境調整を可能とする。また、(3)教師や保護者の子ども理解を促進し、(4)教師や保護者が児童との相互作用を最適化させやすい、という特徴があることを明らかにした。

第Ⅲ部では、中学校において適応的・不適応的生徒が、それぞれ学校環境とどのように相互作用し、そこにはどのような差異が認められるのか（第8章）、環境の変化によってチーム援助がどのように影響され、またチームが崩壊する意味は何か（第9章）、中学校の相談室において生徒はどのように変容しうるのか（第10章）、について検討した。

第8章では、適応的な生徒と不適応的な生徒の学校生活を、生徒や教師の語りを通して比較することで、両者の違いを検討した。学校では、特に体育祭などの学校行事

場面において、共通の物語（communal narrative）が生み出される。そして、学校に適応的な生徒や教師たちは、その共通の物語をそれぞれの文脈で語り直すことによって、活動の意義を見出し、個人の語り（personal story）を更新することが多い。一方、学校不適応的な生徒たちは、この共通の物語に接近する機会に乏しく、共通の物語を自己の文脈で語り直すことがほとんどできなくなる。このことは、教師や同級生と相互作用する機会が奪われ、ディスエンパワーされていくことにつながる。学校には共通の物語という資源があり、それをどのように語るのかにおいて、適応的な生徒と不適応的な生徒には差異のあることが明らかとなった。

第9章では、突発的な暴力を繰り返す生徒に対して、変動する学校環境の中でどのようにチーム援助が行われたのか、そして、チームが崩壊することの意味は何か、の二点について検討した。その結果、(1)教師は、学校行事などによって高まる行動場面の圧力を、成長促進力として作用させているため、比較的學校行事の少ない一学期には、生徒に合わせて柔軟にチーム援助できるが、行事が多くなる二学期になると、チーム内に葛藤が強まることが明らかとなった。また、(2) チームという枠組みが崩壊したとしても、担任との関係は変わらず、そのため担任は Winnicott (1971) のいう生き残った対象となり、対象生徒が担任を頼りはじめるというプロセスのあることを明らかにした。うまくいっていたチームが崩壊した後であっても、学校には生き残った対象の抱え直しという援助機能が働く可能性を指摘した。

第10章では、異空間的な場所としての相談室において、生徒たちがどのように変容するのかについて、筆者のスクールカウンセラーとしての事例を用いて検討した。その結果、(1)生徒が相談室に接触することは、「ケアを受容する能力」が発揮されているものと捉えられ、(2)この段階をこえると、生徒たちは内的資源としての趣味や興味の世界を展開することが多くなる。そうすると、(3)その活動が共有されはじめ、(4)活動が共有されることによって話題が共有されるようになることが見出せた。これらのプロセスは異学年、異性との間でも形成されることであり、そこでは対人関係の編み直しが起こり、自己認知にも変化が見られる。ケアする側にもケアされる側にも立つことができるようになり、柔軟に物事を考えられるようになっていく。学校不適応的な生徒の学校生活を、相談室の機能を生かしながら支援するためには、そのようなケアの空間を守りながら、そのプロセスを育てるための大人の見守りも必要であることを示した。

第IV部第11章においては、本論で追究してきた生態学的視座からの支援とは何かについて、(1)人と環境の相互作用が学校行事などで常に変化することを前提し、(2)児童生徒が問題行動によって表現していることの意味を、周囲との関係も含めて見立て、(3)その見立てを児童生徒がかかわるシステムに提供することによって、心理職が自らを作用させながら、(4)手持ちの資源や問題を捉える枠組みを変えるなどして、問題の解法を発見する接近法であることを明らかにした。本論文の限界としては、と

り上げた学校の特殊性という点、筆者の観察を中心としている点、家庭や地域などより広い生態系から子どもを理解するに至らなかった点、が挙げられる。今後の展望として、人と環境の適合をめざした生態学的視座からの支援のためには、その両者を捉えやすいポジションに立ったコンサルテーションを追究していくことが必要であることを指摘し、残された課題とした。